慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヴェニスの石(中) ラスキン伝一八四九-一八五三年の一節
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.4 (1924. 4) ,p.557(93)- 582(118)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240401-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雜

たの

である

ス 0 石」(中)

ラスキン傅一八四九 ——八五三年

0

Æ

なった。 72 伴を得たる旅に園する少なからざる喜びを經驗 誘ふて伴はしめるを得ざりしが、ラスキンは侶 此の瑞西廻遊には、新しく得た友、ミレ の目的は勿論「ヴェニスの石」の完成にある。 行者を得て瑞西より再びヴュニスに赴いた。 一八五一年八月ラスキンは妻と共に数名の同 其處には又もや强い刺戟が彼を待つてゐ 愉快なる旅行の後彼等はヴェニスに入つ イスを

る ひ、藝術の研究に耽つては自然の偉大を魅力と 兩者は何づれもラスキンにとつて貴重なるもの に一つの平衡を保ちしもの、如くである。 建築藝術の研究勞作はタアナアの偉才賞讃に托 方法によつて結びつけられるものである、元來 を忌じ難しさなす。 は自然の眞美にのみ汲々たる事の足らざるを思 の間に彷徨してゐる。 命との源泉であつた。 であった。 した彼の自然解説の派生的傍系であるに過ぎな *ニス建築の藝術美との兩者に惹かれて共間 彼の大自然に對する熱情が熾烈なりしを述べ 此の時のラスキ が彼の心は再び自然界へと戻って行つたの は既に一八四九年の旅行(瑞四)に於け 其は終生渝る事なさ幸福で喜悦と生 雨者は遂にラスキン獨特の 併し屢、彼は兩者の臧興 人間藝術の尊貴を認めて 自然の美と 此の

第十八卷

(五五七)

雜

500 る。 足る力と熱とを以つて彼の魂に にラスキンの全生命、 き社會、政治、經濟等に關する諸論 して放擲したものではない、 の美術論、 轉向によって中道にして放擲せし事は無い、 ラスキンの勢作が関す する勞作は彼に散漫なる放擲を許 うは少しをせざれざも彼は一つの問題を興味 であるい唯 も堂々たる徹底的研究の結果を認めうるであ 故に彼の多岐に亙る著書の中に讀者は何 怪奇の非難てそあれ、 第十八卷 建築論、自然論乃至軈て見出 彼の遂行の途にある建築藝術に關 (五五八) 全精力を傾注せしむる 散漫を以つて非難せらる 何づれも中途半成に 是等の諸 觸れたも さなか 8 ヴェニスの 偏見、 問題は のであ し
う
べ つた。 固 常 づ 0)

の勢作の繼續に吸引せられた。勿論彼の興味 の時に在りてもラスキンは建築論に投せる 失し たのではない 唯後に示さる \ \$

> 現象の **せんとする勢作の夥しからず以つて直ちに自然** の間にバランスを保てる時なり は明かにラスキンの心が藝術と自然との真善美 をなすものなるが、從つて一八五一年瑞四廻遊 趣视察は「近世帯家論」第三、 後年自敍傳中に同想しては一八五○年より六○ 云はしめ 年に五る期間の大部分は多く空費せられたりと 六〇年別途の變轉によって又もや影響せられ * ニスの石」の完成よりも更に再び自然界の現 同年八月十九日デュネグラに發せる彼の書翰に へで轉じて行つたのである、この轉向は一八 かっ かに彼が軈て「ヴ し彼がヴェニ 視察に戻りう可さ意郷を語つてゐる の感興は「建築の七燈」の連續なる「ヴ たのである。一八四九年の旅行 スに *ニスの石」の完成に投 到るに及んでは、 第四の雨窓の基礎 し事を語る、 中の興 左程

容易に其地を棄て去るを得なか ったい 九月二日

れる。 の世話による彼の住家に對する感情中にも現は 此地に はは 緊張と勞作に充てる忙しい も深く威謝す」と書いた。 ヴュニスへの執着は其地に於ける彼の友人 フヴ 九月父に宛てた手紙の中で此の居宅に ありて著述を完成し、 ニスは今迄よりも遙かに美し、 從つて弦に又極度の 彼の生活が行はれ 修正しらる事を最 余は 言

こゝでは私の生活中初めて本當に自分の家に住んださ云ふ氣は私の罪で、外の人の罪ではありません。・・・何故と云へばす、ですから若し著述が巧くゆかぬさ云ふならば、確かにそれ 一令私の氣分に學校以來令迄にない程きちんさ落付いてゐま するからです」と。

姿を同想せしむるに止まったのである。 年に至つては單に其當時の喜悦に充てる 併しかく彼が其の執着に熱せるヴェニ 自己の スも後

當 ローリングウッドの云へるが如くラス Ŧ ンは

(五五九) æ == スの石

時来だ隱者でもなければ異端者でもなかつ

の人記 中彼は草稿と其地に於ける研究を必要とするも ある。 推敲は歸英後の仕事である 書いた。 の本に這つてゐる」と彼は五十二年二月四日に 第三兩卷の構成執筆に投じた でに亙る一日を絶えず 整頓の のに外なら 動は主さし bi pi てもラスキン夫妻は其の社交界に可なりの地位 故に彼の交際は相當に廣くヴェ 録を悉く纒め得た、勿論彼の構案、揀擇、 其は) ある席上に Ħ. 彼自身も英國のそれに比して落着きど てラス 総遂に彼 十一年九月より翌年六月に五る滯在 13 3 時間はラスキンの仕事を妨げるも + 彼は朝六時年より の關係ではなく從つてその活 列するを 好みし 様に 思はる ン夫人の舞臺となつたので ブヴェ 可以 ニスの石し 夜の九時ま = 心も皆自分 スに於 第二、

ラス 言をの ンの宗教論並びに其感情に就 「建築の七燈」「ウ T, ニスの ては前

第四號

九五

三卷第一章はその思想的變遷を吟味する上に於 いて最も興味ある一章である。其は彼が遂にプ は宗教觀を研究せんとする者にとつて自敍傳第 傳中に於 しなりと漏してゐる。ラスキンの宗敎的感情又 **彼傅に記する所によれば「ヴェニスの** に當りて研究せる歴史的知識は彼の排羅馬教的 する反抗の表現にして建築藝術其他偉大なる 石」に著しく認めらる、排ロー 神を强 。「近世勘家論」に於いて述べられし テスタント なりし加 趣術とロ 1 せんとする努力を語るものである。彼が 教徒の教育を受けたラスキンの羅馬教に から 6. てラスキンは、偉大なる時代 マンカソリックとの結合を少くとも 流の偏見より脱却するの經路を描 對する彼の尊敬は當然その時代精 力数々義の承認に彼を導く可か め たのである。然かも同 ~ ニズ 石」の用 山嶽高地 じ自敍 0 カソ 自

思想を嚴粛ならしめその心情を純化するの山嶽 代最偉の國民又は基督教信仰の最大なる敎者の 観じ『余は最も强く此の戯化の下にあり 相俟つて心情に敬虔なる觀念を深からしむるを 遁的生活は是等地方に於ける偉大なる自然力と て彼はグランド は唯一 120 ラウの視界に在りし時であつた』と、 しうべからざるを語り(一八四九年の旅 は賢明に費されたるものとして囘想しうる時代 下余に與へられたる力に從ふて、 回想 ものも皆、丘岡の間に於いて叱責せられた、而 が穏當なるや否やを問はず、全く眞理では 悟りしが如き思想を認めう可しとの主張 **氽の有せる通常の過誤又は弱點は** し『岩陰の間に古 モンプラン・モンティロー プスの大自然が心情を純化するの力を シャ ルトラズの修道僧の尊敬 の隠遁者が荒野に於い ザ或はユンク 悉く正しく又 此點に於 如 し時古 行) 隱 彻 あつ なる 7

及ばんでするのである』と。故に一八四〇年の きて教を説き又は荒野に踏み入つて祈らんとす 宗敎家は に至りし程に徹底せるものであり、かくて彼等 確認するを得ざりし一事感、即ち、此の高さ階位 る事あらば自から己を迷びて或は途に堕落にも らも自然の美又は崇高による敎養を受け得ざる ては、先づ十五世紀の美術上の奢侈によつて、次 を有せる凡べての感覺性が、近代歐羅巴に於 いで十八世紀及び十九世紀初期の卑俗なる慾望 いては正しくそを研究し得たりと余は信ずるの んど試みたり よつて毀滅せらるくに至りし事情は之れを細 する事なかつた。然かも其毀滅は宗教家自 力を「近世畵家論」の最後の章に於いて研究せ 併し其當時余の單に顧得するに止まり つて他の衆人に益あれども、 かに都會の敗頽中にあつてその奉仕 然かも其時余の爲しうる限りに於 中に赴 か 4

> の僧院 地の靈覺に基くもの カソリシズムを描いてはかく云ふのである。 の敬虔なる生活は其の隱遁的生活を圍繞する山 旅行に於 四四年の旅行に於いて見聞せるシャモニ に於ける修道尼との交談に就いて彼女等 いて經驗せる、 なりで断じ、更に一八四 Fe Puy 0 Michael

遙かに愉快にして が未だ内に残しおける些々たる信仰をも消滅 なるものゝ如く全く基督教的であり、 せしめんとする、 心の中に、其生活が吾人のついて知れるいか に於ける生活の全様式を見、か 『吾々は何づれも純カソリックの村落、谿谷 英國の日曜日の勤行より 麗しき ものと認めたさ くて私は皆が 又吾人

又月曜日も等しく。且つ若き時も又老いたる 時も常にあらゆる 余に於いて更に深 時と事情とを通じて、 から印象は 日 曜日 8

(金大二)

1 生活の上に自 ッ 7 せる ステ 方に彼等の完全なる名譽と U) テン 幸福なる った 信仰を絶えず且 其は 尙はサヴ の山 地

論学又は他宗の信 和 3 の中に残れ 仰者に るものであり 對する害意なく かも L 何 ~

大なる 端なる を感じ たる者の 度に ŋ はカ 次の一點 ソリッ クの 世俗 7) 二八四五 ソリ 1, て救 政治 的物質的生活に嫌厭を催 17 ク教義に融 . 9 的孤 は 的階級組織と天國の狂熱にかくつてゐたのである。彼 クの藝術を崇拜 年) 更にラスキン 黨とが其の反對者に對 ざる 合し得ざりしお其 せるにも が近 4 拘 且

7 る 信 仰を保てるのであつたら

6 < ť 义グ 見 12 *ニスに於ける修道院生活に n る關係 得 が何 程大なる過誤に づけ の國に 多大

たのであったら 神の平 変で の唯 と慈愛に滿て 無極の慈善さに 和は 一の不變的形式は有益なる勞作と 勤勉なる貧しき者のあ る心情の上に置か ある事 の感を强くし n 6 Ø 純粹 3 義

共鳴を感ぜし 既成宗敎並 **示**り ント流の宗教観を棄て ば、 51 51 3 結果一日フレデリッキ る者である。併し他方 ればラスキ 解釋に不滿を覺えしむるに到つた。 1 プロテスタント ピサの びに其の獨存 め の愛好は漸次カソリック 15 なる威情は漸次消え失せると 力 ン プ・サントに於いて働け かくて彼自からの言葉に從 誤り うく行うつ 流の 12 r. 釋義に疑問を懷 彼は 他の精神 る基礎に立 ウリスに反 次プロテスタ の聖書研 ځ. 精神との 権威と つ形式的 かし 叉 発は 14] 3 71 8

導者の 於いても公正 かくてラスキ £ 彼等に對する非難を招きし所以である ンは近代的生活 にして且つ寬宏なる自 の一般を批 由主義的 評して

故により原始的な或ひは一般的な宗教的感情出したのである』。 爲めに用っ ても等しく彼等が神の法に恭順ならざるを見 地上の 活の 義務 かか いては、 から b 3 より逃避し、 俗外で致會内とに於いて均し が同じ夢想 < の如 快樂を求めんごするも、 づれ 余 ゝを見い 意せる史書研 12 に於け 神の完成を求めんとするも将また くに尊敬し愛撫するを爲さいるに ップ 更に彼等が其直接且つ日 と慾望とによつて迷路に導き x. るを問はず、 又禁慾的或ひは放縦なる生 ニス 纶 0) の着質なる進行 石 の著述に際して いづれ 其隣人を彼等 4 に於い A 時の の中 4 0)

『是等の事 破見せらる! まつたの 的出來事としては一八五 cian free-thinking に多大の不満を感せる彼は聖 つたのである。 書の解釋に於いてプロ とせず御次 リス流の釋義、ラスキンの名付けて云ふ Mauri ヴェン 掟を破るに至つて、 來に てある デリカ 属する 情の交錯中にあつたのである」。 IJ 12 まれ ソ % ル y 至りる當時 たる宗教的教義の虚偽も必然に 故に な信仰 し其は る宗教的思想の變遷は外面 ク教の釋義の賢明なるを悟 茲 遂に最後の點に テスタント N 八年彼がサバ 尚は來る一 辩 遂に一掃せられてし 彼の宗教的感 言するの のそれを是正 可き数年後 要を見 到着 る安息日 (モウ 12

かつた。 大の影響を及ぼせるについて正しく單なる研究 0) 共研究が彼の社會觀を決定する上に多 讀は 此 頃の海 外滯 化 中に も廢されな

第十八卷 (五六四) 雑 錄 ヴェニスの石

の考へ方は聊か到利的である、即ち曰くの宗教的經驗を語つてゐる。其處に窺はれる彼形的儀式の遵守が何等効果なきを見更に又一のに宛でたる書簡の中に現はれる。ラスキンは外た。諸種の疑義、宗教的感情はヴェエスより父と非ずして上層構層の基礎さなれるものであつの考へ方は聊か到利的である、即ち曰く

『兎に角私は聖書を興賞のものさして振舞は いまに 61人五二年四月九日間 でない として 表 は ありませんし、キリストを信仰し彼を以って 私のあらゆる行為の師たらしめんと決心しました。確かた全然聖書を信ぜぬと云ふ事は ました。確かた全然聖書を信せぬと云ふ事は ました。確かた全然聖書を信せぬと云ふ事は ました。確かた全然聖書を信せぬと云ふ事は まって 70人五二年四月九日間 でない として 振光山 61人五二年四月九日間

書中に於いてバランスを保てる事を想像しうる は非羅馬教的觀念と之れに相反せる變化とが同 に非羅馬教的觀念と之れに相反せる變化とが同 であらう。

的感情に就いて語りたい。更に此機會に於いてラスキンの純真なる宗教

してゐる。
してゐる。
してゐる。
してゐる。

"I began thinking over my past life, and what fruit I had had of the joy of it, which had passed away, and of the hard work of it; and I felt nothing but discomfort in looking back; for I saw that I had always been working for myself in one way or another. Either for myself, in

第十八卷 (五六五) 雜 餘 ヴェニスの石

らんには、否少くとも特に不利を蒙る事無から て、同時に又神の存せざる事をも示し得ざる可 即も神の存在を示し得ずとなす否定論者に對し **教心に囚はれざる、所謂信仰心の乏しきラスキ** てラスキンの神觀の全部となすは妥當でない。 る。(八月二十四日附父宛書翰)併し之れを以つ に留まる。父ジェームスと子ジョンとが母に比 ン父子の間に問題として論せられたる所を示す 簡は比較的に宗教的儀式に冷淡であり形式的宗 の終局の主張なりとは云へない、 しはラスキンの常に認むる所である。 して極めて嚴格なる意味に於いて非宗敎的なり 功利主義的に考へ論決する事を以つてラスキン んには、信ずるに積極的なるの利益を説いてゐ しとの論據によって、神の存在を信じて利益も 嘗て一八四八年にも彼は斯くの如く考へた。 蓋し是等の書

「ヴュニスの石」第二卷には屢、著者が育くま

doing things that I enjoyed, I e. climbing mountains, looking at pictures, etc.; or for my own aggrandisement and satisfaction of ambilion, or else to gratify my affections in pleusing you and my mother, but that I had never really done anything for God's service. Then I thought of my investigations of the Bible and found no comfort in that either, for there seemed to me nothing but darkness and doubt in it."

せらる可きものとして美術的關係の生活をあげ更に自敍傳に於いても彼の靈的精神生活に對比

From John Bunyan and Issac Ambrose, I had received the religion by which I still myself lived, as far as I had spiritual life at all; and I had again and again preof enough of its truth, within limits, to have served me for all my own need, either in this world or the next. But my ordained business, and mental gifts, were outside of those limits. I saw, as clearly as I saw the sky and its stars, that music in S.otland was not to be studied under a Free Church precentor, nor indeed under any disciples of John Knox, but of Signior David; that, similarly, painting in England was not to be admired in the illuminations of Watt's hymns; nor architecture in the design of Mr. Iron's

chapil in the Greve.

"Miss Edgeworth may abuse the word 'genins' but there is such a thing, and it consists mainly in a man's doing thing because he cannot help it,—intellectual things, I mean. I don't think myself a great genius, but I believe I have genius; something different from mere cleverness, for I am not clever in the sense that militins of people are—lawyers, physicians, and others. But there is the strong instinct in me, which I cannot analyse, to draw and describe the things I love—not for rep tation, nor for the good of others, nor for my own advartage, but a sort of instinct like that for eating or drinking. I should like to draw all St. Mark's

only the possession of any part in them; for long and long ago I had gazed at the illuminated missals in nollements houses, with a wonder and sympathy decree than I can give new; my love of toil, and of treasure, alike getting their thirst gratified in them. For again and again I must repeat it, my nature is a worker's and a miser's; and I rejoiced, and rejoice still, in the mere quantity of chiselling in marble, and stitches in embroidery; and was never tired of numbering sacks of gold and cackets of jewels in the Arabian Nights.

and all this Verona stone by s'ore, to eat it all up into my' mind, to ch by touch. More and more levely I find it every time, and am every year dissatified with what I did the last."

併しラスキンが宗教的良心に對して真に非難 がしラスキンが宗教的良心に對して真に非難 であらう。其間の事情は均しく自敍傳に語られ であらう。其間の事情は均しく自敍傳に語られてある。

But I had never cared for ornamental design until in 1850 or, 51 I chanced, at a book seller's in a back alley, on a little fourteenth century Hours of the Virgin, not of sefund work, but extremely rich, grotesque, and full of pure colour.

The new worlds which every leaf of this book opened to me, and the joy I had, counting their letters and unravelling their arabesques as if they had all been of beaten gold,—as many of them indeed were—cannot be told, anymore than everything else, of good, that I writed to tell.

Not that the worlds thus opening were themselves new, but

である。 に齎らされてのみ悉く其儘に之れを認め得 得ざるは當然であり、 を知る事なくしてはラスキンの主張思想を解 に物語るに外ならぬ。 として巷間に現はれんとするに至る經路を有力 以は軈て直接に神意神性の解説者として説教者 の解しは是等を神性の徳と属性に歸一せしむる 讃美さ之れに對する服從の訓であり、 ものであった。然かも彼が其處に慊らず思ふ所 への奉仕に非ずとするもその主張は常に神性の 真を保つてゐた。 味以外に於 得たり、傅へらる。 いてラスキンの態度は常に宗教的純 彼自からはその生活が直接神 世は兎に角かかる性質の趣 又彼の矛盾も偏奇も此 此の純真なる宗教的感情 其の美真

聖書の研究は常時の社會事相が何を意味せるやの社會觀政冶論の色彩を益々叫瞭ならしめた。是等の關係は五十一、二年に於りるラスキン

第四號 一〇三

らない 遂に公表せらるゝ事なくして終つたラスキン最 議の感を與ふるものではない。吾々はかくして 初の政治問題に闘する執筆に言及しなければな なる社會問題に關する概察を載せしものが少く 思想は彼が研究中著しく注意を惹いた點であ と窮乏との正しからざる分配に就て、より廣汎 を考察せし 滯在中に起つたとしても其は吾人に何等不思 なる銃を振ふに至つた事が五十二年のヴェニ い。さればラスキ 期の彼の書簡中には富裕と貧困のい 公正、貧富に對する詩篇作者の ンが公然政治問題に彼の雄

育に關する 三つの 書翰を 先づ父に 宛てく送つ ス紙に寄稿する目的を以つて租税、選舉、教 一八五二年ヴュニス滯在中にラスキ 不幸にして此等の背前は此方面に於けるラ ンはタ 1

印授を帯びデ 革の an である 一八五二年二月にはスタンレー卿が内閣總理の は後者の解職より惹いて前者の死解を齎したい 失敗せるを以つて再び廟堂に立つた。 閣は破れたがロード・スタンレーが内閣組織に 憲章黨運動は抹消せられるに至つたが選舉權改 行は められ ド・ラッセルピロード・パアマストンさの内訌 た。一八五一年早々ロード・ジョン・ラッセルの内 は保護政策に 復歸するの の目的は達せられずに三書翰は空しく筐底に納 勿論當時の政治上の時事問題に關する彼の觀察 運動は たがディスラエリを中心とする保守黨は尚 れてゐたが愛蘭問題は依然未解決であり、 ン親子の意見の不一致を承し遂にラスキ てしまつた。ラスキンのタイ 。此時英國に於いては、羅馬教徒解放令は 尙は繼續してゐた。 1 スラエリ 15 Chancellor 企圖を捨て得なか 穀物條令は撤廢 ムス寄書は 併しロー 2

と嘲笑し Exchequer となり又政府黨首領であつた。 貿易を擁護し直接累進課税 書に於いてディ 書に於いては後に 有無に從つて其投票には輕重の意義差別を附ら ては 人は何づれも投票權を有すると共に財産教育の 題に移したのは丁度此時であつた。彼は第 のと普通選舉とを併合したる制度を唱導し各 ラスキンがヴィ は教育の原理を解明して教育の内容には博物 べきを説明し、從つて此點より第三書に於い 國民教育たるべきを主張する 時勢に先立つ、「半世紀」と称せらる 去り自由貿易を租 政治學の諸要素を含み其範圍に關し スラエ ニスの假居に於いて筆を政治 Fancy franchise と呼ばれし リは單に小説家に過ぎす 法を主張した。 桃原理さを論じ自由

> でない。 石」第 を引用 られる。 當に深い交渉のありしを思はせる。 部に表現するの域に達せざるが故に彼の傾倒す スキンはカアライルより傳へたる精神をそい全 より接したる称讃の手紙によつても此頃最早相 は更に後日の穿鑿をまつ事とする。 る事未だ全身的でない事を想像せらるく。 し更に 窓に 併し「羊含構造論」中にもカアライ カアライルとの交友は不思議 ついて彼の歐本に對しカアライ 後段に記するが如く「ヴェニスの 併し未だう 21 ル

「此頃カアライルとの突始まれり」さ云ふも以上の意味に過ぎ に基くのである。故に一八四九Ⅰ五○年の頃の交友を記しても其論據は「ヴェニスの石」第一卷に對するカアライルの手紙六卷の序文に云ふ所「恐らくは一八五Ⅰ年以前の事」さする ない。併ライブラリーエヂションの前窓はラスキン普翰集で にラスキンの書翰を見れば交友漸く繁きに到つたのは一八五あるが其序文にクツクが掲げたる所のカアライルの手紙並び にラスキンの書翰を見れば交友漸く繁きに到つたのは一 五年の頃と思けれる。 100 ツクがライプラリ エデシ ヨン第三十

彼の見解はカアライルが Latter Day Pamphlets

1

を出版して後二年、其影響を受くる所多しとせ

(五六九) 雜

ヴェニスの石

一〇五

對する彼の立場を説明して云ふ (一八五一年 に於いて書かれてゐる。 企圖に であつた。 恐る人所は其子が共和國論者に轉せるやの危惧 月十六日父宛背翰) エリの貸敬者である父ジュームズはジョンの此 第十八 對して極め 誠に是等の書翰は一つの反抗的精神 の然かも其舊派に属する又ディ て大なる苦惱を感じた。 ラスキンは政治問題に 彼が + ス

にして合理的なる原則で指導しようともして 目となつてゐます。かくる事の根元は確かに の質敬すべきロンドン 狂暴なる時に於いて達したる原理は今や吾 に於いて始まつた狂激である。其狂激が最も 『佛蘭西革命は兇塞なる政府の必要なる改革 層階級の間に 起つた 運動の 真の 根據があ 彼等は又勿論此運動を何等の正しく公正 ます。政府の中に行は 市民の食後の演説の題 れた思切つた弊害、 14

> 1 分にどつて一番健全なる立場であると考 泳いでゐるからだと思ひます。 味ですが) だからして大變意進論者だど。私が魚の好き ど凡 にあまり同情 であるが埃太利にあると外の皆が保守論者 (勿論食用をしてどなく生き物としての意 4. ての人々が急進論者なので大變に保守論 (-理由は魚は常に流れに頭を向け を云ひました。 しすぎては し私は氣 を附 ならぬ。 私は けて、 私は 佛蘭西に居 エッフィー 其れは 急進論者 へま 自 3

文との交渉の中に明かである。 より 恐れる所である。 然かるに斯 『英國よりの 四月二十六日に到るラスキ (の 如き態度は父ジェ 是間の消息は同年三月六日 ンの書翰による 1 ズの最

私はとて も耐へられません。 報道は實に馬鹿 K 私は此三日 々し過ぎま

思つて頂きたい・・・』(三月六日附) うでなかつたら皆父上に宛てゝ書いたもの > **
**
** ます。・・・・若し父上がタイムス紙に寄せて ムス を穀物條令、選舉問題と教育に關 考へになったら載せて下さい、 紙に書を寄せる爲めに用ひ様としてゐ 平紙を書くに除いてある ţ, 若しさ してタ つも U

を欲 故に此 のであつた。 て了つたとしても其は豫めかいる約束に基く からでげる。 し且の父の態度を慊らず思つた所 書翰が父ジュームズの手に握りつぶさ 併レラスキンが他迄其書 別は次の公

スが其れを載せるかどうか私には分か 送くるに値するとお考へなさつたか又 即ち是等の ん、併し私は嫁ろかう云ふ希望なのです 十四日 書翰が現在に何にか爲めになると 五七二 父上が私のタイ ヴェニスの石 4 ス A h ませ 1 4 ip

12 6 する事 はまだほ 同様に私は二十年以後になつて私が生きてる になつて其時に陳べら ので印刷物の中にさう云つたのではないので する してゐるのです。 小供の意見なご何人も氣に らぬらのだと云ふ事を直に云ひまし 爲め 併し私はタ 12 是等の手紙に言及して「自分は諸君に が出來たらど、 對する現在の制度が採用せら つておいたい を望むのでなくて、 んの小供でし 気がつき 夕 1 な 所 イ 希望で公表を欲するの ス ムス 於 は 心から願つてゐます。 n す したのだ」と云ひ得 紙に寄書しておいて今 たーが私は かも今になって諸 れは此事 た自分の意見を引證 めて僅か を載せるの かけまい 其制度は下 としても れた時私 と感じた 12 です。 勿論 Ď 12 は

れによれば彼は世んとした書翰の一内容を語つてゐる、即ちそ此書簡は次いてラスキンがタイムス紙上に寄る力を與へる事になるでせう」。

方法に就 累進税率が相互に妥當たる可きの方法、即ち事を見出しました。同じ方法で私は所得稅の 年九百磅を得る人が八十一磅の納税を强制さ 一方年八百九十九磅の所得を得てゐる者は七 うけた、併し其は除り遠く走りすぎると云 で低廉なる勞銀の問題に入らんとする誘惑を ておいた。私は低廉なるパンの問題と相結ん 『私は是等の書翰を出 て、 一を残しうるなんて事のない様に、妥當の 一磅十八志四片四分ノ一丈けを支排へばよ 爲めに所得が八百十九磅に減少されるのに 從つて後に八百二十七磅一志七片四分 V て更に 深い 陳述を企てた 來る文け平易簡單にし بح 3

支けを望んだのです。
場所をどるので、先づ原理を明瞭ならしめるってるましたが、是等は何づれも除り多くの

二十年後を期望するラスキンも是等の所説が 地して新奇なる考に非ざるは認め、更に屢々衆 外して新奇なる考に非ざるは認め、更に屢々衆 知つてゐる。たぐ簡單な問題が種々錯綜して其 處に真と誤とが合體してゐる事あるが故に真相 を捉み得ず真の解決策に適し得ないとするので ある。

は知らぬが凡べての口が同じ問題に就いて語きす、――人々は今日見るが如くに又無用の部だと云ふかも知れない。私は又如何に多く論だと云ふかも知れない。私は又如何に多く論だと云ふかも知れない。私は又如何に多く

來た。 の游離を企つる事の方がより賢 せられてゐるこ云本事はありうるのです。 ンの文法書同様、別に斬新なる何事かを云は 事を示してゐます。 も简単な問題に對して人々の頭腦が混う。私が新聞紙などで見る所のものは なるものゝ凡 す。若し人々が其を目して平凡の眞理だと云 いては、 りも 恐らくは 遙かに 有益なるもので ありま 文法的。 んこするものではない。が簡單明瞭の形式で ふならば彼等をして其の上に行動せしめませ つゝある 若し人々が凡べて誤てりと想像するなら 併し其が虚偽と混同 其は充分に注意して守らるゝ限 普通の規則を與へんさ企てる 經濟學上の諸論文に充てる圖書館 べてが幾百萬度となく云はれて 眞理が屢 是等三つの書翰はイ 雜 語られ せる限り 別であ 又屢了容認 ヴェニスの石 飢いづれるれ いりに於 るでせ b づ其 ので 1 1.

は、それこそ是等の書翰が益々必要だと云ふ

此の時父の返信によつて明かである様にジェームズは旅行中であつた。デュマアク・ヒル宛の三書翰は母の手に受取られた。イー・ティー・の三書翰は母の手に受取られた。イー・ティー・る様に贬したもの、如くである」と推斷してゐる。蓋し三月二十六日母宛の書面には母に對してる。蓋し三月二十六日母宛の書面には母に對して英國並びに一般歐洲事情に就いて言及してゐる。

『三角二十六日――・・・母上が英國に於いて年でつくある事についてかほごよくな考へになってゐると知つて大變嬉しく存じます。併生じつくあるを知つて大變嬉しく存じます。併生じつくある事についてかほごよくな考へに

第四號 一〇九

全文はそれを削つても連絡をつけて讀めます の文句には第を入れて下さる事を願ひます。 す。 はディスラエリ最負の父上の事故彼につい になってゐらつしやるといけません て了まはれないてせうが、又送らう する所 部分の つて過誤 やつてゐると云ふ事は非常に喜ばし では ひは 母上が未だ私の書翰をタイムス紙に送つ 地域に比較する時、 衰退しつくあつて廢滅に進んでゐる のものです。 種の文明に開けた地方の、 の外何ものも い方が反つてよくなるかも 併し新内閣が可な あり 正に英國に ません ゥ とお思ひ から、 知れ い事で ら存 りらま から 、は又人 の石 大 今

んでラスキンは自己の立場が父のそれと異なら察してゐる。併し父から直接の返信が到るに及 是等によつてラスキンは早くも兩親の反對を

> 化なきを表明してゐる。 生後共に談ず可きを約し更に彼の態度に何等變交の心勢となりしを陳謝し同問題については歸交の心勢となりしを陳謝し同問題については歸なの心勢となりしを陳謝し同問題については歸なる。三月二十九日、三十日の書翰は即ち其れざるを辯じ且つ彼は謂ふ所の本旨を明かにして

本當に ゆる點で十年以前ありしまゝの私であると信 今は持つて居ないと云ふ事以外には他のあら き文句を書いて以來確かに意見を變じてはお じております。 ムズ二世の爲めに起立してゐた當時の尊敬を つの點即ち私が嘗て有したスチュアート家に お考へになって御心配下さるな。 『・・・俳し私が共和國論者に轉じつくある ません。私は忠節で云ふ言葉は、 するジャコパイトの質敬、 意 味する所 私は「七燈」の中で忠節につ もの、即 大學時代にジュー 私はたじ 結局其が r n

する 對す 遊ひ其を代表する限りほ於 を意味し又單に一時定時に於ける成定 る愛を意味し みならす ものとさせたのですい 50 或は たのでする。 法で恭順との諸原 即ち王者が法律 いて王者に對す する貸敬を意味 理 法 3 17

のそれ等を其儘に容認しないのである。 要求に反抗 n ばん 此最後の點はラストン のである、 實 法 は彼は現在社會事相中に現はれ來たる諸權 後年並びに三十日 誓約第七項に現は 殿的企圖でして現はれ するのである の正しからざるを指摘し之れが打破を し權威、 之れが爲めに自由、 法則を尚び乍ら然かも既成 附の手紙には 此思想は彼の社會的 の思想中最も特殊な たのである。 12 * 聖デョ 平等の 更に 選舉權 沂 1 换言 チ組 代的 同書 改

第十八巻 (五七五) 雜 錄 ヴェニスの)

力であ 止する あり 票に於いて庶民の全関よりも私の方案によれば才能や地位 一般的 つて生ずるかも知れませんが種 事と ると云ふ事を御覽になるでせう 普通選舉さ云ふ事より 充分に御注意下されば私の考が では全く 考へる 從つて庶民は最早投票の り贈賄の | 論題の陳述であつて其を支持するの努い。 | 取が出來ませうし、又利の三型によし 般民衆以上に適當の優越を與ふるに b 投票数に た、蓋し其の爲めには、敎育資産に 所あつて資産义は教育によつて與 **蓋**餅に歸するでせう ませんから其點には這りません 組織は少くさも五磅札の形 關して格別の明細を企てま 可なり隔つた 勘説に値しない ては若し父上が のある一人は 層重きもので 父上と同じく 徒黨が或は 々の方法で防 もので 式 7

へます、 仕事は私に と云ふ事はもわかりでせう。 エリに關しては私の一昨日 であると云ふ事を云つた丈りです。 しても 私にはありますから。 ると主張します、たど 資産及び教育の平 めると云ふ事は不條理に 彼に對して何等怨恨を持つてゐるのでない 生するとしたならば其は分 入りません 値を維持し或は増 るに適した一番最後の人間です。 はも しめるのです。同様に私は土地 一つい意見を與へる事を不可能ならし チャンセラア・オブ・ゼ・エキスチェッ 怜悧だが浮華であると云ふ感を與 つと駄目だった んでした。たべ若り 均的分配を研究する必要が 彼 の意見に適當の して無益な侮辱であ し私は如何なる人を でせう。 の手紙で父上は私 ディスラエ 明、し、さな、何、方唯、等、法 私は近代 デ゛ O act e-恐らく 1 の。の。議 が其の 損害 りの 損害 論に スラ 重 カ

と信じますし、檢證に關しては各人は、彼の のです。 ます。 も百位で加算するもいづれも同じ様に容易だ に就いては計 論者を参らせる事になり得ます。 とは考へませんが彼はさう考へて其を實行し分の一票を提出する事を自分の割に合ふ仕事 激な御者も投票権を持つてゐませう。私は自銘々投票権を持つてゐます、同じく私共の過 くして彼は他の可なり多くのより甚しい過激 十票を持つており私は四百叉は五百票を持つ するものく一團としたいのです。 等の 日に證明せらるべき所の捺印に於いて受く 名と票数とを毎五年目の檢證日と稱する一 地位、 私の方案に從ふと彼は今七十ですが五 私は投票するの勞を取るでせうしか 思慮並びに富に比 選擧に際しては、 算家に どつては十位で加 例した重さを有 計算の困難 父上も私 算する B

> ます。 非常に 的意味に於いてい 頭がいるの い 1 政治家となる様になみならぬ多く だと云ふ事が尤もらしく思は 一つの悪い小説を書くに n

事です。 倒であらら所の民衆と上流階級とを加へ、 易に買收されやすい 何にして彼等を國に於いて正確に 刷術の發明以來其は不可能です。 不可能事中大部分のものはその爲ですが、 選舉につい に關して考へる事 勘考しており 三月子日 です。現在では英國の選舉則ものならしめるかと云ふ事で 一人毎に二志六片で買收するにはあ ば非常に喜ばしいのですが ました。 かにお仰 から引き離す事が 中流階級です。 私は此三年の 私は一般の人 せられた所 體は低級な容 唯それ丈け 適當 私は之 の諸 間 出來るな 々を政治 今日ある まり面 の重 圓 父上 12 n 0 4 如

なぞを無駄口を聞く事がない。くすれば大した混雑はないし又選擧に於い の順序に於 して其數を認め、 て彼の捺印を示し、 口を聞く事がない いて書かれ、そして退出する。 彼の姓名は同時に其の文字 彼の侯補者の名に相對 T か

は適當なる人間 タアナアは正しく七十歳に於いて其盛頂に遠 ゐるに非ざれば心力は常に增加するのです。 より發して十六歳位に於いて然かよく生じて 歳以下の人にして何等衰退せるを今迄に見た しました然 事がありません、寧ろ其衰退が疾病或は遊蕩 持つまいと信じるからです。 私は 々は五十歳を過ぎなければ考 『私は年齢の制限を七十歳におきます、 内に衰滅するも 非常に活動的な生活に於いては多く かも其以前ではあ 生命に定められたる のに はあらざる事を而て凡 私は知力が七十 りません。 へるなんて暇をいては多くの人 「七週」 蓋し

てのその最も良き最も有益なる力は若し精 が適當に収扱はるくならば肉體の結びつく 留まるものであるを信じて おりま

るる 意見さ合致を見たるを喜びつく其内容を語つ 四月二日の書翰に於いては教育論につい て父

はならず、又少しでも残すざてはならない、 大切なのです。どつちの側に少しでもよつて 時に常に得るのです、初め輕く。正しい方向 たと云ふ事を非常に嬉しく思ひます、私は、 『私は教育論の手紙が父上に喜びをお與 **父上** 事を爲すには始めからあまり力いつばいや すぎずに 自分の指を注意しながら打つと云ふのが がお仰せられた事と全く一致してあり 人は此教訓を松の平板に釘をうち込む 脛く打いておくこ云ふ事につい \sim

治

私は なる。 敗られる狀態に自からを曝してはならな 様なものだが、 遊ふ ての私の感情は次の様な鮎でも前のと大變に に對する攻撃や新聞寄書に對する攻撃につい 4 ス 思ふのである。 關と感ずる人は些細な力によつて屢ゝ打 「貧民窟普嗣」だ。そして権威が必要な への あなたの著書に對するあらゆる攻撃も デ 手紙を先づ見ませり。 1 お前の政治論は打毀はされや スト ンの燈臺にぶつかる波の あ なたの著書

スラエ つチャ 既にあなた自身を惱ましてゐる事だらう。ディ して利口な小説家ださ云ふ ツは弱々しく終るかも知れない。 ンセラア・オブ・ 誰彼に對して好敵手 彼は議會を統率しい 質に驚く可さだら ,T., 4: お前の時代嘲弄は スチ であり 1 x. ッ 又彼の飯 ジ カアを目 ョンや

71

を全然歡迎しなかつた。三月三十日ラ アに於いて父が發したる書翰 於けるが如く父ジェームズはラスキンの政治論 如何 斯くの如き詳細と懇篤を極めた手紙の交渉 30 の職業に於けるよりも大工職には多くの典型 つがい 板の如さものであります。公衆を何にかに仕 經濟の諸問題に其思索を筆とを轉じた時に なる結果を楽したか。 きつりる事が出來ます。 入つてしまへば指を雕して打打張く張く 聖ジョセフの職業とされてゐた如くに、他 いど釘は ゝ遂に己の腕を充分振り と する人達は怜悧な大工と考へられ 決して入りません。 後年 ラスキンが 政 は次の 公衆はよくこの松 上げて材木を ン ħ • ス <u>_</u> Ø

らお前がさり願ってゐる様 5 91

ある

寧み とした舊稿に就い を表したに相違ない。 親密なる關係はラスキンの親に對する孝心以外 に最早何等他の知識的關係を結び得ぬ事となつ ・ラファエライトに関してタイムスに寄 彼が自から父の意思に反して進む事を爲さず 水た。 0) 語る如 の如 的 ラスキンは父の此の態度に 態度をとりしを示してゐる。彼はプ くに父ジェ き態度に於 て語り乍ら、 併し四月二十六日の背簡 いては 4 ズと子ジ 多大の遺憾 ・ティー ンの間の せん "

としてゐます。 に就いて父上の不賛成なるに容易に る 『私は今其を自分で讀んでみ ふる所あるを見て以來、 かつた事に正しかつたかを知つて驚いてお かを見出し、 從つて私はタイ 質に私はダアビー卵が國民 如何に父上が其を公にせじめ ムスに送る別の書翰 内閣に て如何に拙 對するか 信 頼せん 21

度を攻撃し きませ を苦し お喜び の教育制度ほど しなければなり 杉 断をする事 ます。傍し私は時 攻撃が現はれなか を外 いてゐる ます、 2 に知 'n 0) < C 様に親は 12 何時か が出 御手紙の ます。 ませ し私としてはあの書翰を好んで いと思ってゐるのです ません、蓋し、 來 ない 常に多くの改革を要する は何等かの形にそれを改作 n つた事を既に感謝しても からし。 如 た教育に づれに 何に自 は最初は父上が非常に のかと云ふ事を考へる 分の書いたもの も何等 闘する最後の手 分が偏頗であり 私は現在の制 郭言 現在 を頂

遂に事 れず する三つの 30 ュニス淵 して終ったのであるが、 の結末を見た。 简 を筐底深く藏さるくに及んで 出來事であつた「政治に關 從つて同書翰は公にせら イー・ティー・クック

會觀は 是等の 包含せられ、 者を見出すに到りし事は著名な出來事である 不可能であつた。 第十二卷には租稅、選擧論に關する二篇を集むるに止まつて書館中に發見せられなかつだのは其爲めであらう。圖書舘版代の教育」さして載せられてゐる。恐らく其舊稿が政治論同 々として續けたのである。 に厳したり 卷々頭カツカの序文に載せられたものである。 して利用せるものなるが故に此項は同窓に L. 0) 以上引用した材料即ちラスキンの諸書翰は 教育論丈けは「ヴェニスの石」第三卷の卷末補遺「近 中に開陳せらるゝに到るまで共發展を徐 思想は十二年後に 「アンツー・ジス・ライ 合して「ヴェニスの と難も、 遂にそが社會主義一派に深き共鳴 彼は自己の路を誤れず進んだ にする所以である。 彼の所信を曲げしむる事は 然かも既に是等の社 石」第二卷の一章に で資ふ所頗る大であのる。其處より取捨

に於ける「耶蘇傑像」を Madonna della Saluta 事がある。 一八五二年のヴュ 其はチント ニス滯在には尚は語る可き の大作 St. Cassiano ヴ エニスの石

> られ と云ひ國民教育制度と云ひ何づれも後年實施せ 族主義的政治論に關するもの以外には課稅原理 さり 即ち **闘書館版はラスキン著作について正確詳密を期** 年と稱讃する 前途に充たさる、事なかり とウェッダ する為めに後年發見せられた同書 ィースト スキ スキ て第十二卷々末に載せたのである。 しもの、 しラスキ 父ジー ンが企圖したる の政治觀を以って時勢に先立つ事五 ンの燈臺にも比す可さものであつた。 アバアンの編纂になる ラスキン全集 4 正に父の云へる貧民窟普請はエッ の機會を與へ得しめたのである。 ンの政治論は其の排民主々義的貴 ズが謂へる「貧民窟普誦」に過ぎ 「二十年後」の B 後世の 翰の 拁 か 殘稿を集 人々が 望は生 くして +

雖も、 ŧ ンが和解的迎合的態度に於いて父に對せりと 一八五二年の一挿話は之れで終る。併しラス 又父が如何に深くラスキンの書簡を館 底

て最初 る 委托に於いてナショナル・ギャレリーに購入す 爲めに拒絶せられてしまつた。此はナシ チン 館の評議委員會に申込んだ。不幸にして此事 の計畫をたて、其旨を一八五二年三月に同博 Marriage + þ の失望であつた。 レット V リー ä に關する彼自身の係つた事とし の書に價値を認むる事なき人々 Cana の二名書を一萬二千磅の ョナ

の冒頭に殺せるラスキンの心情は弦に於いて明 1 " " 八五二年六月に終へ、ラスキンの一行はセント かに窺ひうる。 は再びアルプス山地の魅力に惹かれた。 は 斯へして多忙、 次の如き句がある タアドを越へて歸國した。此途次、ラスキ Airdo に於ける七月四日 多端なるヴェニスの滯在は の記録 本稿

ある風光の純潔の對照は現はし得ざる ッ ニスの汚穢と悪徳に對して今日余

一七

程頭いものである・・・」と

の石」の結末が語られなければ、らない。 感を覺えしは草原丘陵 んとするのであるが かくしてラスキンは再 ノェニス つの傍 とも云ふ可き荒地に居る 仕事であつた 0) 其に先立つて X クの言葉を借 間に於い 自然界の研究に没入せ てであつた。」 ブ ラス b て云 ュニス キン .~\ 0) 35

附記 ラスキンがヴェニスに喜びながら然かも時には忌憚なたのでの、いったのに此常時の回想である。此書面は可なりラスキンの氣持な現はすものこして興味がある。次に一部を抽出する。『一八五九年五月――其地で私に非常に多くの困難で乾燥無味な、機械的勢作を警めたので其地を去る以前に全く実魅力を失つてしまつた程です。分析なんて忌まはしい仕事です。「問題を充分に論じ悪くす人間は不愉快な人間だと云ふ事は實にたしかです。…」

か語る有力な材料である。 勿論此書中にはイー・ティ・クツク此態度は近世勘家論第三卷のそれに對比してラスキンの気質

(未)

リカアドオ派社會

主義概論 (下)

津田

誠

-

文獻以外行藏多~湮滅に歸せるも、獨りホジス前掲リカアドオ派社會主義の諮星に關しては

1820 を上梓、爾來事ら文筆を以て處住の道を講 遊感想錄 "Travels in the North of Germany" を利して外遊三年、佛獨伊瑞諸國温歷、歸來伉儷 たるを漸く一八二三年 Place 並に を得て居を Edinburgh に定め浩瀚二卷に亘る外 Francis Place 彼れが閉結禁止法撤廢の闘士をして、 時に 幼少にして海軍に入り累進大尉たるに及び偶々 彼は **属言上官の忌諱に觸るゝ事ありて豫備役に編入** するありて稍詳細に其經歷を窺ふ事が出來る # ンに於ては佛人 Elie Halévyの錄せる傳記の とせしが事志に違ひて外しく たる機緣亦た此一篇に發すと推せらる。 の過酷上官の擅恣刑罰の殘忍を痛撃した。 年二十五。 "An 一七八七年末倫敦附近の Chatham に出生、 Essay on を始め政治的急進派諸名士の知遇 乃ち 憤怨禁ずる能はず翌一八一 Naval Discipline" 貧窶に沈淪し James Mill O 著聞せる を表は 存

stitute 家畜を訓練するに等しければなり の思想の根本であつたと。 限り、 か h 働者の か た。 るを得ない。 は自己の為め自己の手に依つて敎育を行はざる と共に 得た。 Institute と協力週刊雑誌 Mechanics' Magazine を發刊する の盘쬮は此時より始まる。 議會記者となり 斡旋に依り急進派の機關紙 Morning Chronicleの 教育を授かるよりは寧ろ教育を奪はる の經營維持は急進派中産階級の資力援助 蓋し斯の 真に彼等に必要なる教育は決して確保す 獨立教育を提唱せる先驅である。 恰も擡頭し來れる勞働運動に對する彼れ ن. ن Place を創設以て 勞働者階級の智的開發に努 「之を庶人の爲に計るに其主人よ H. Cole は凹く、 の保護の下に工手學校 如き教育は軛に懸けんが爲めに 倫敦に轉住するに及んで小康 然も 即ち蘇人 Robertson ホジスキンは勞 Mechanics' In-とは、 Mechanics' トに如 勞働者 n y

餱